

地理教材としての地形圖 (八)

渥美半島

陸地測量部五萬分一地形圖 豊橋、蒲郡、伊良湖岬、田原、同二十萬分一地形圖 豊橋、地質調査所二十萬分一地質圖 豊橋、

九州博多灣に於ける海の中道半島と、東海道三河灣に於ける渥美半島とは東西の好對照である。是に似たものを中國に求めれば出雲の宍道半島であるが是は少しく趣を異にして居る。

一、海岸の地形 半島の骨格は秩父古生層の堅岩で、是を被覆するは第四紀の砂、砂利、粘土の如き軟質疎鬆のものである、従て古生層より成れる海岸は懸崖を爲し、山は奇岩突兀たるものがあるが、第四紀層地域は、低い臺地又は山間の低平地を爲して居る、太平洋海岸は、古生層の走向に殆んど平行なる一直線を爲し、古生層の懸崖の下に、處々狹小なる第四紀層の低地が介在するに過ぎないが、三河灣に面せる内

側は、福江灣、田原灣の如き灣入があり、灣口には潮流や風浪の爲に生じた砂洲が長く東西に突出して居る、福江灣では、西方立馬岬より東々南に殆んど直線狀に長い砂洲があり、東方は伊川津の北から、鎗ヶ崎が鉤狀を爲して、前記の砂洲と相對して灣口を扼して居る、田原灣では波瀨から東々北に大洲崎の長洲が發達して居て、灣内には是に平行の砂洲が數條横はりて居る是等の砂洲が發達するほど漂砂の堆積が盛であるから、内海沿岸は、白谷や仁崎に於ける如く古生層丘阜の海に逼れる處の外は土地の傾斜頗る緩漫で、低地、臺地が廣く發展して居て、外洋に面する側とは、著しく地形を異にして居る。

半島の基部に於ける豊川の灌域は奈良、平安朝より鎌倉時代まで細長き入江であり、田原町

の東南沙川も亦昔は彎曲せる深き入江であつた
田原城に巴城の名を附したのは是が爲めであ
る。

二、海岸の變遷 概言すれば太平洋海岸は波
浪の爲に崩壞減退し、内海岸は砂洲の堆積の爲
めに増進の傾向がある、海圖によれば、十尋の
等深線は太平洋岸の絶壁よりよほど離れた處に
ありて削壁直下の狭小なる低地の他に水底に没
在せる一帯の淺瀬があつて、或る時期に於ける
地盤の沈降を示して居る、加之半島の基部高豊
村大字豊南には畔田屋敷といふ南北朝から室町
時代の城趾があるが、北部に濠の址があつて南
側は高さ七八十尺の絶壁を爲して海に臨んで居る
昔村民は城南の平地に住居して居たが、海岸崩
壞の爲に次第に臺地の方に移住した形跡がある
東觀世音寺の棟札に城下といふのは、此城南の
平地を指したものでらしい、又半島内に於ける古
墳分布の状況より考ふるに、伊良湖岬の附近の
外は、外洋に面した方面には、遺跡として觀る
べきものがない、多少この方面にも山麓に低地

がある以上、古來全然住民が無かつた譯でもあ
るまいが、波浪に浸蝕せられて無く爲つたので
あらう、伊良湖岬村大字和地の海岸斜面に在る
二個所の貝塚は、幸にこの破壊を免れたもので
あらう。

三、聚落の變遷 半島内で石器時代の遺跡の
存するは、福江灣と田原灣の沿岸が主なるもの
で、太平洋岸には、伊良湖岬村に少しく存する
だけである、是は内海に面する側の方が風浪穩
かで、食物も得易く、生活が樂であつたから、
自然石器時代には主として内海の沿岸に聚落が
發達したらしい、この先住民族は緩斜面を以て
海に臨める形勝の臺地に居住し細紋式土器を作
つたもので、其遺跡たる貝塚の多いこと全國に
著名で、珍しき豎穴も福江町大字保美に發見せ
られ數多の骨や、有髣土偶をさへ出して學界
を驚かした、次に彌生式土器は半島の西端福江
町字中山から、東北隅牟呂吉田村まで、連續的
に發見せられ、原始日本民族は渥美灣沿岸一帯
に住居したものでらしい、又半島の中央部神戸村

(谷ノ口)、西部泉村(村松)、伊良湖岬村(和地)より銅鐸を出し、保美、羽根、貝の濱、大本の各貝塚より銅鏃を出した、斯く狭い範圍から盛に銅器が出土するのは、頗る注意すべき事で、半島の古生層中には銅鑛脈があり、現に泉村、野田村の山中では昔時の掘採の跡がある。

有史時代に入り、古墳の最も多いのは、半島の西端福江町、伊良湖岬村と、東端二川町とであつて、田原灣の沿岸牟呂吉田村、高師村、老津村、田原町にも散在して居る、是等の古墳から當時文化の優越を示す、太刀、馬具等の逸品が續々發見せられた、當時は農業も漸く進み河岸や山麓の平地が開拓せられ其處に聚落が發達した様である、工業としては窯業が發達したと見え、窯址が處々に殘存して居る、其中田原灣の南岸杉山村大字六連なる百々窯址は、奈良朝時代の完全なる窯址である、此窯業は、其原料たる陶土と燃料と海運の利便の爲め、平安朝に至て最も隆盛を極めたらしく、西は伊良湖岬の尖端から、東端二川町、高師村に至るまで、半島

の中央を東西に走る丘陵中に、窯址が幾百となく點在して居る、平安朝より鎌倉時代にかけて、瓦の製造が頗る盛であつたらしく、伊良湖岬村字瓦場及び字深山より發見せられた瓦片には、東大寺大佛殿瓦の文字が記されてあつて、鎌倉時代の初に再建せられた奈良東大寺の瓦は、渥美半島で焼たものと思はるゝ、又近年伊勢國宇治山田天神山から數多掘り出した經瓦には、承安四年三州渥美郡伊良湖郷にて造るといふ文字の讀まるゝものがあつて、當時の技術と彼此交通の一端を示して居る。

四、交通、文化 遠く石器時代の交通は不明を免れぬが、石鏃(石器中に半島に産出せざる水晶や黒曜石等があるのを觀れば、既に他地方との交通があつたに違ない、恐くは水路により三河の西部や、伊勢尾張(知多)と交通したものであらう、原始日本民族は、大和、紀伊方面より海上を黒潮に乗じて、半島の西端より漸次東方に占居したらしく、彌生式土器や銅器出土地の分布上、大和から十津川を傳はつて紀州の南海

岸に出でたり、大臺ヶ原から、溪谷を傳つて多氣川に沿ひ伊勢海に出た形跡がある、伊勢と渥美半島とは内海を距て、相對して居り、陸路交通未開の時代には、海岸線を辿るか海路に依る他は無いが、内海は波靜かであるから、海を横斷して交通するのが最も簡易であつて、上古以來伊勢と渥美半島との海上交通は頗る頻繁であつたに違無い、従て大和朝の文化は、伊勢方面より先づ此の半島に波及し、半島は附近の内陸地方に比し、格段に優越した文化を有したのは當然である。

大化二年驛傳の法を設けられ、大寶制令以後陸路の交通は面目を一新したが、尙半島と伊勢間の海路の交通は依然盛であつて、伊良湖崎より阿濃津に渡り、鈴鹿を越えて都に入たらしい東海道は奈良朝時代に於て、既に寶飯郡の渡津より渡船で、豊川の入江を牟呂附近に越した舊道と、豊川町古宿の附近から飽海附近を通過する新道と所謂二見道があつたもので、海路伊勢より伊良湖岬に來る交通は、半島に沿ふて太平

洋岸を縦走せる街道によつたものらしい、遺跡や傳説又は詠歌等によるに、行基や西行は、何れも伊勢より渡海し半島を縦行して居る様である、鎌倉時代以後南北朝まで尙相當に往來者があつたが東海道の交通が頻繁と爲るに従ひ、渥美半島を縦貫する伊勢街道の交通は次第に衰微し、沿道に於ける繁業の如き産業も漸く衰へた加之此街道の交通に一大打撃を與へたのは、寶永四年の大震災である、此震災の爲に、太平洋沿岸の村落は大半流失し、從來の街道は大破壊を爲し、到底修復不可能の状態に一變したから内海沿岸を傳ふ現今の通路と爲つたのである。尙中古以來伊勢より伊良湖に上陸せずして、内海沿岸を吉田(無蓋橋)に渡る海路交通がある、現時も福江、田原を経由する。汽船はこの海路を採りて牟呂に航通して居る。

五、要結 之を要するに渥美半島は、交通上東海の要路に横はれる縦半島で、伊豆半島や三浦半島の如き横半島とは人文上の意義や、交通上の價值に於て大に異なるものがある、縦半島は

往古より海陸交通の衝に當つて居る爲めに、居住者も附近の他の地方より早く蕃殖し、交通の頻繁なる爲め、文化も遙に優越の地歩を占め、農、工、商、漁等の各種の産業も亦他の地方に先ちて著しく發達繁榮したる事績が認められ、他の内陸地方や就中同一内海中の横半島たる知多とは大に趣を異にせるのは、人文開發史上頗る面白い現象である。而して時代の進歩と共に陸上の交通が利便を加ふるに従て、海と陸とを兼ねたる半島縦貫の交通は漸次衰退し、工商等の産業も亦衰微して、今や内陸平原地方に到底及ばざるのみならず、平原に連續せる横半島たる知多の後に墮著たるを免れざるは、亦是地形の然らしむる影響とは云へ、眞に今昔の感に堪へない譯である。(石川)

○西村教授の訃

東京女子高等師範學校教授西村萬壽氏は二月十三日卒去された。同氏は明治三十七年東大地質を卒業され直に廣島高師に赴任されて數年地理及地質を擔任された、其後現職に移られ専ら地理を受持たれて永く著陶に從はれた。其間地質調査所や學智院に職を兼ねられたこともある。地學雜誌には地理教授に關する論文を寄せられたことが少くなく地理の一般化に甚だ務められた。我が地球學園でも同氏の援助を得て地理教授に關する記事を掲げたいと思つて居つたのにこの温淑な學園員を失つたことは日本の地學界と共に痛惜に堪へぬ所である。